様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：２７１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３５８２

研究課題名（和文）終末期がん患者の口腔管理の重要性に着目した教育プログラムの確立

研究課題名（英文）Establishment of an education program that focuses on the importance of oral health management in palliative care patients

研究代表者
高橋　由希子（TAKAHASHI, YUKIKO）

九州歯科大学・歯学部・講師

研究者番号：１０５８２７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：終末期がん患者に応じた専門的な口腔管理プログラムは現状では実施されていないため，開発に取り組んだ。教育プログラム内容は，事前研修，病棟研修，報告会の3部構成であり，患者への対応を重視した内容となっている。事前研修終了後，受講者は6日間の病棟研修を行い，それぞれの受講内容を報告会で共有した。
平成28年度にプログラムを実施し，受講者からの評価を得て，教育プログラムの評価および改善を行い，新・教育プログラムを実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
終末期がん患者に応じた専門的な口腔管理プログラムは現状では実施されていない。このプログラムを実施する患者側への意義は，適切な口腔管理を受けることで患者は口腔内の苦痛や疼痛を緩和できることである。そして，終末期がん患者は体調の変動が大きいため，常に相談できる歯科の存在をもてることの2点である。
終末期医療でプログラムを実施する意義は，専門的知識をもつ歯科医療人の育成により困難な症例にも対応が可能になる点と，専門的な口腔管理ができる人材が増えることで医療全体の質が向上することの2点である。

研究成果の概要（英文）：We have developed an "educational program that focuses on the importance of oral management in terminally ill cancer patients." A specialized oral care program tailored to such terminal cancer patients has not been currently implemented. The contents of the education program have three parts: pre-training, word training, and briefing session. Pre-training consists of systematic learning and practical learning, which emphasizes the treatment of patients. After the training, the trainees will carry out 6 days of word training and share the contents of each training at a briefing session.
The program has started in 2016, and the evaluations and improvements of the educational program were made with the evaluation from the students in 2017. After the evaluation, we have completed the new education program in 2018.

研究分野：口腔保健学

キーワード：終末期がん患者　専門的口腔管理　緩和医療　palliative care　歯科医療者に対する教育　QOL (=quality of life)　口腔関連QOL

様　式　C－１９，F－１９－１，Z－１９，CK－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

がんは日本の死亡原因の第 1 位である。がん患者が最後まで自分らしく生活するためには，治療だけでなく口腔管理も重要である。私たちはがん患者の口腔管理の重要性について長年研究を行ってきた[1)]。

この重要性が認識されてから，各医療機関では積極的な口腔管理を行うようになった。「口腔管理」とは，「口腔衛生管理」と「口腔機能管理」のことである。「口腔衛生管理」とは，口腔内の保湿や衛生管理を行い，口腔環境を整え，感染管理を行うことである。「口腔機能管理」とは，摂食・嚥下機能やコミュニケーション機能の維持管理のことである。

これまで末期がんの患者のみに行われてきた緩和医療は，治療の早期から行われるようになってきた。そのため歯科でもがん患者の様々な症状に対応した口腔管理法が開発されてきた。しかし，末期がんの患者のうち歯科受診が必要な患者は 43.4%，口腔内が乾燥した状態にある患者は 100%で[2)]，口腔管理を必要とする患者に治療が行き届いていない。なぜなら，患者に対する専門的な口腔管理ができる歯科医療者が不足しているからである。この現状を改善するために，専門的な口腔管理を学ぶ教育プログラムを提供し，患者に対応できる人材を増やすことが急務と考えた。

２．研究の目的

終末期がん患者を口腔機能面から支援することを目的とし，これまで開発に取り組んできた「終末期におけるがん患者の口腔管理の重要性に着目した教育プログラム」を実施し，受講者に研修に対する評価を得て，改善することでプログラムの確立を目指す。このプログラムが大学の卒後研修プログラムや現職者向けのフォローアップ研修でも使えるように内容を充実させていくことを目的とした。

３．研究の方法

(1) これまで開発に取り組んできた以下に示す「終末期がん患者の口腔管理の重要性に着目した教育プログラム」を歯科医療人に対し実施する。

	研修内容	担当
事前研修 5 日間	体系的教育 ホスピス・緩和ケアについての講義 （それぞれの立場から）	医師・看護師・薬剤師 管理栄養士・臨床心理士 作業療法士・理学療法士 言語聴覚士・歯科医師 歯科衛生士
	実践的演習 ・ 様々な患者を想定したロールプレイやテュートリアル ・ 口腔マネジメントについての講義および実習	医師・看護師 臨床心理士 歯科医師・歯科衛生士
病棟研修 6 日間 栄光会栄光病院	・ ホスピス病棟での 2 名 1 組の実践研修病棟 ・ スタッフミーテイング，カンファレンスおよび回診への参加 ・ 病室訪問を行い，患者の受け持ち，専門的口腔マネジメントを担当	医師・看護師 歯科医師・歯科衛生士
事後研修 2 日間	研修のまとめ ・ 各自プレゼンテーション ・ ディスカッション ・ 病棟研修の事例を通し，テュートリアル中心のプログラムにて研修内容について共有	医師・看護師 臨床心理士 歯科医師・歯科衛生士

(2) 研修受講者から評価を得て，プログラムの改善を行う。

(3) プログラムの再検討を行い，完成させる。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

①プログラム研修会本部

このプログラムを実行するため，研究協力者 8 名に本部運営事務 1 名を加え，病棟研修を行う社会医療法人栄光会栄光病院に研修会本部を立ち上げた。

②「終末期におけるがん患者の口腔管理の重要性に着目した教育プログラム」の実施

教育プログラムを行うにあたり，多忙な受講者に対し，勤務時間外の時間設定を行うなどさらに学習しやすい環境を配慮することを検討した。

事前研修 5 日間，病棟実習 6 日間，事後研修 2 日間の予定は，事前研修はターミナルや緩和ケアに特化した内容とし，病棟研修中または事後研修の不明な点についてはメール指導を行

うことを考案し，受講者の日常業務に差支えがないよう配慮した。その結果，事前研修 2 日間，病棟実習 6 日間，事後研修 1 日間に日程変更を行った。

③プログラムの運営

歯科医師会や歯科衛生士会に受講者募集を依頼し，雑誌等にも研修会のお知らせを掲載した。平成 28 年度は歯科医師 2 名，歯科衛生士 4 名，平成 30 年度は歯科医師 1 名の計 7 名が研修プログラムに参加した。

④プログラム受講者の評価

研修会本部ではプログラム受講者の終末期におけるがん患者の口腔管理に関する知識と実技の評価を行った。

病棟研修を受講するための事前研修は，シナリオにそって，ケーススタディおよび口腔ケアの実技試験を行い，研修会本部員および受講者それぞれ事前研修の評価についてディスカッションやグループワークを行った。病棟研修では SOAP を使用したポートフォリオを作成し，研修報告会ではポートフォリオをまとめ，報告発表を行った。

⑤「終末期がん患者の口腔管理の重要性に着目した教育プログラム」の評価

プログラム受講者には事前に「口腔ケアに関わるアンケート」および事後に「口腔ケア研修事後アンケート」を行った。

概ね，受講者 7 名は，研修会の講義および実習に対する評価は 5 段階評価の満足の評価が多かった。今後，受講者を増やし，研究成果を学界のみならず，歯科医療者の教育に還元していく予定である。

(2) 今後の展望

この研究助成にて，歯科医療者に対して終末期がん患者の専門的口腔ケアを習得する教育を提供し，患者に対応できる人材を増やすプログラムの開発に取り組み，実施と評価を行った。今後，終末期がん患者の口腔管理のできる人材育成を継続していきたい。

九州歯科大学では 2 年前より緩和医療についての講義を行っており，緩和医療の講義を受講した学生に対し，「緩和医療に携わりたいか」の質問にも歯学科学生の半数以上、歯科衛生士学生の殆どが「携わりたい」と答えている。

「終末期」の患者の状況を考えると研修機関は限られるが，今後病棟研修を受け入れてくれる機関が増えれば，卒後研修プログラムとして裾野は必ず広がっていくと考える。

現在，終末期医療の主体は病院であるが，超高齢者社会となった今，在宅での見取りが推進され，自宅で最期を希望する患者は増加している。今後は介護保険や訪問看護を利用しながら，自宅での看取りが中心となってくることが予想される。そのため，在宅緩和ケアの担い手である看護師や介護士が口腔ケアの重要性を認識し，知識・技術を習得することが不可欠であると考えられる。今後は，歯科医療人だけではなく在宅療養を支える医療職の看護師や介護士を対象とし，病棟および在宅での終末期がん患者の口腔ケア教育プログラムの開発にも取り組んでいく予定である。

＜引用文献＞

1) 牛坂朋美，高橋由希子，末期癌患者に対する口腔ケア―口腔ボランティアを導入して―．感染防止 14(5)号：38-43，2004
2) 高橋由希子：終末期がん患者における口腔関連 QOL とそれに影響を与える因子．日衛学誌 5(2):23-37,2011

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）

1) 高橋由希子，伊藤恵美，亀岡祐一，引地尚子：終末期がん患者に対する口腔ケアが口腔関連 QOL におよぼす効果．九州歯会誌 70(4)：101-113，2016
2) 泉繭依，中道敦子，松田悠平，高橋由希子，秋房 住郎：受験者の心理的圧迫感に考慮した OSCE の教育的効果の検証―ステーションにおける評価者別席による比較―．日衛教育誌 8(2)62-75，2017

〔学会発表〕（計　6　件）

1) 仲村真耶，引地尚子，林加奈子，松田悠平，泉繭依，高橋由希子，園木一男，中道敦子，秋房 住郎，日高 勝美：回復期病棟におけるチーム医療実践プログラムに対する学生の評価．第 8 回日本歯科衛生教育学会総会・学術大会（平成 29 年 11 月 25-26 日，柏原市）
2) 船原まどか，泉 繭衣，高橋由希子，中道敦子：緩和ケアに関わる歯科衛生士教育の現状について．第 15 回日本口腔ケア学会総会・学術大会（平成 30 年 4 月 28-29，福岡市）
3) 園木一男，泉繭依，高橋由希子，邵　仁浩，吉野賢一，中道敦子，引地尚子，秋房住郎，日高勝美：修士のキャリアパス構築に関する研究．第 79 回九州歯科学会総会・学術大会（平成 30 年 5 月 25-26 日，北九州市）
4) 泉繭依，中道敦子，高橋由希子，引地尚子，秋房住郎：受験者の心理的圧迫感に考慮した OSCE の教育的効果の検討 －ステーションにおける評価者同席と評価者別席による比較－．第 79 回九州歯科学会総会・学術大会（平成 30 年 5 月 25-26 日，北九州市）

5)　泉繭依，中道敦子，辻澤利行，高橋由希子，船原まどか，本田茂代，庄野幸音，　下坂桃子，林加奈子，秋房住郎：地域在住高齢者における口腔機能に関する調査研究．第 79 回九州歯科学会総会・学術大会（平成 30 年 5 月 25-26 日，北九州市）
6)　高森みなみ，船原まどか，泉 繭衣，高橋由希子，林加奈子，本田茂代，邵　仁浩，中道敦子：ブラッシング後口腔内に飛散する口腔内微生物回収方法の検討～清拭と含嗽について～．日本歯科衛生学会第 13 回学術大会（平成 30 年 9 月 15-17 日，福岡市）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：武田康男
ローマ字氏名：Takeda Yasuo

研究協力者氏名：今﨑智子
ローマ字氏名：Imasaki Tomoko

研究協力者氏名：松岡千恵子
ローマ字氏名：Matsuoka Chieko

研究協力者氏名：上村美樹
ローマ字氏名：Uemura Miki

研究協力者氏名：下稲葉　康之
ローマ字氏名：Shimoinaba Yasuyuki

研究協力者氏名：山田 幸代
ローマ字氏名：Yamada Yukiyo

研究協力者氏名：大野康
ローマ字氏名：Ohno Yasushi

研究協力者氏名：伊藤恵美
ローマ字氏名：Ito Emi

※科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。